

飯綱平遺跡 Ⅱ

—飯綱平住宅地造成工事に伴う発掘調査報告書—

2005年2月

豊田村土地開発公社
豊田村教育委員会

飯綱平遺跡 II

—飯綱平住宅地造成工事に伴う発掘調査報告書—

2005年2月

豊田村土地開発公社
豊田村教育委員会

序 文

飯綱平遺跡は、豊田村豊津地区に所在する遺跡であり、村の住宅地造成計画に合わせ、平成4年に発掘調査が実施されています。今年度、7区分の住宅地造成が計画されました。計画箇所は周知の埋蔵文化財包蔵地内並びに隣接地であり、前回の発掘調査では未実施の箇所でした。平成16年4月当初から2回の試掘調査を行い、7月から本調査となった次第ですが、本書はその成果をまとめた報告書であります。

今回の調査ではこの地方でも遺跡が少ない、縄文時代後期末葉の粘土採掘址と土器・石器が発見されたことは、当該期の研究に有益であります。さらに網代痕のある土器などはこの遺跡周辺においての生活様式を研究する上で、今後、重要な資料となっていくのではないのでしょうか。

今年の夏は少雨で、しかも記録的な猛暑が続く毎日でした。今回の調査は、炎天下の中で硬くなった地面に水を撒きながらの過酷な作業となり、続いて行われた整理作業についても、非常に細かな土器片を相手にした困難な作業であったと思われます。調査にご参加、ご協力をいただいた調査団長さんを始め、調査団・作業員の皆さんに心から感謝を申し上げます、本書の刊行のあいさつといたします。

平成17年2月

豊田村教育長 神田 智

例 言

- 1 本書は長野県下水内郡豊田村豊津替佐飯綱平に所在する飯綱平遺跡発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成16年7月13日～8月31日にわたって実施した。
- 3 本調査は豊田村土地開発公社より依頼を受けた豊田村教育委員会が、鉈中野広域シルバー人材センターに委託して行なった。併せて豊田村教育委員会は本調査の指導にあたった。
- 4 遺構及び出土遺物の注記は、下記のとおりである。

S K	土坑
S D	溝状遺構
ケ	検出
ネ	粘土探掘跡
S X	不明遺構
S X-1	粘土探掘跡No 4
- 5 調査区のグリッドは4メートル単位で北からA～I、東から1～14と表示した。
- 6 本報告の執筆は檀原長則、竹田保夫が行った。
- 7 石器実測とトレースは尾澤みつ子・竹田保夫、写真撮影は竹田保夫が担当した。
- 8 本遺跡の出土遺物及び遺構図・写真等の記録資料は豊田村教育委員会が保管している。

備考・豊田村は2005年4月、中野市と合併予定である。

目次

序文

豊田村教育委員会 教育長 神田 智

例言

第Ⅰ章 経 過	1
第1節 発掘調査前の経過	1
1 経 過	1
2 調査団の構成	1
第2節 発掘調査の経過	1
1 発掘調査日誌	1
2 整理作業	2
第Ⅱ章 遺 跡	3
第1節 遺跡の位置と立地	3
1 位置と気候	3
2 立 地	5
第2節 土層の状態	5
1 土層の状況と基本層序	5
第3節 飯綱平遺跡周辺の遺跡	6
1 豊田村と奥信濃の縄文後期の遺跡	6
第Ⅲ章 遺構と遺物	9
第1節 縄文時代	9
1 遺構の概要	9
2 遺 構	9
3 遺 物	13
土 器	13
石 器	23
第2節 平安時代	25
1 遺 物	25
第3節 中 世	25
1 遺 構	25
2 遺 物	27
第4節 近 世	30
第Ⅳ章 ま と め	32

図版目次

第1図 遺跡の位置	3
-----------	---

第2図 調査区の範囲	4
第3図 周辺の縄文後期の遺跡	8
第4図 遺構配置図	9
第5図 粘土探掘址地層断面図	10
第6図 No.4 粘土探掘址	12
第7図 No.1・2 粘土探掘址	11
第8図 後期縄文土器(1)	16
第9図 後期縄文土器(2)	17
第10図 後期縄文土器(3)	18
第11図 後期縄文土器(4)	19
第12図 後期縄文土器(5)	20
第13図 後期縄文土器(6)	21
第14図 後期縄文土器(7)	22
第15図 石器	24
第16図 井戸・水溜め・土坑	26
第17図 古代以降の遺物	28
第18図 砥石・曲物・かわらけ	31

挿表目次

第1表 北信の縄文後期遺跡致	7
第2表 飯綱平遺跡出土の土器底部の網代痕	21
第3表 井戸・水溜めなどの観察表	27
第4表 出土古銭一覧表	27
第5表 須恵器などの観察表(破片資料)	29
第6表 砥石観察表	30
第7表 その他の出土品	30

写真図版目次

図版1 北西から見た調査区全景 表土剥ぎ	
図版2 No.1 粘土探掘址 No.1 粘土探掘址検出	
図版3 No.2 粘土探掘址 No.2 粘土探掘址地層断面	
図版4 石組井戸 SK-1	
図版5 SK-14 SK-5	
図版6 石組水路 底部に痕土器出土状態	
図版7 縄文後期土器(1) 縄文後期土器(2)	
図版8 縄文後期土器(3) 縄文後期土器(4)	
図版9 縄文後期土器(5) 縄文後期土器(6)	
図版10 縄文後期土器(7) 縄文後期土器(8)	
図版11 縄文後期土器(9) 縄文後期土器(10)	
図版12 縄文後期土器(11) 石器	

第I章 経 過

第1節 発掘調査前の経過

1 経 過

平成16年3月 豊田村土地開発公社より豊田村飯綱平住宅造成工事に伴う周知の埋蔵文化財について照会依頼がある。

平成16年4月12日 長野県教育委員会事務局と調査について打ち合わせを行う。

平成16年4月30日 第1回試掘調査を飯山市教育委員会生涯学習課 望月静雄係長立会いで行う。遺構を検出し再調査の指示を受ける。

平成16年5月13日 第2回試掘調査を植原長則氏立会いで行う。

平成16年5月17日 豊田村土地開発公社より、文化財保護法第57条の3に基づく「土木工事にかかる発掘調査」の届出書が提出される。

平成16年5月20日 県教育委員会へ試掘調査結果報告及び意見書を付して、文書提出。

平成16年5月26日 県教育委員会から対象面積1,771㎡の発掘調査を実施するよう通知がある。

平成16年7月7日 豊田村長と鉾中野広域シルバー人材センター事務所の両者で飯綱平遺跡調査の受託契約を締結する。

発掘調査は平成16年7月13日から平成16年8月20日とする。

平成16年8月17日 豊田村長と鉾中野広域シルバー人材センター事務所の両者で飯綱平遺跡調査の変更契約を締結する。

変更工期分は平成16年8月21日から平成16年8月31日とする。

平成16年10月22日 豊田村長と鉾中野広域シルバー人材センター事務所の両者で飯綱平遺跡調査の整理作業の受託契約を締結する。

整理作業は平成16年10月25日から平成17年3月31日までの間とする。

2 調査団の構成

参 与 豊田村教育委員会

教育長 神田 智
教育次長 黒岩 守人
社会教育係長 町田 郁夫
社会教育係 小橋 俊樹

事務局 鉾中野広域シルバー人材センター

理事長 谷本 利夫
事務局長 宮澤 功
経 理 池田 八重子
業務庶務 池田 徹
長谷川 昇夫

調査団長

植原 長則
日本考古学協会会員
山ノ内町文化財保護審
議会委員

調査主任

竹田 保夫
長野県考古学会会員

調査員

薩田 悠平、橋内 賢裕

調査補助員

池田 道保、坂口 二郎、鈴木 金三、
徳永 徳一、中林 喜一、武藤 良助
村上 治、

整理作業

尾澤 みつ子、橋内 賢裕、薩田 悠平

第2節 発掘調査の経過

1 発掘日誌

7月8日(金)

重機による表土剥ぎを調査区北東部より行う。

7月13日(火)

中野市歴史館から発掘器材搬入をし、本調査を開始する。調査区において、豊田村教育長出席のもと開所式を行う。

引続き遺構検出を行う。東西16mに幅40cmの配石遺構、その周辺に土器片を検出する。

7月14日(水)

配石遺構は石組排水路と思われるが、遺物が確認出来ず時代も特定できなかった。石組排水路を挟んで北南に短軸2m、長軸8mの楕円形範囲に

加曾利B式土器が検出される。

7月16日（金）

約3mの円形遺構を確認し、覆土に加曾利B式と思われる土器が検出される。遺構名をSX-1とする。

7月22日（水）

SX-1の中央部に径約50cm、深さ約30cmのフラスコ状の落ち込みを検出する。

7月23日（木）

中央部の遺構検出を行う。

溝状遺構2箇所を検出し、それぞれ須恵器片を1点が出土する。

7月24日（金）

SX-1の西側に短径約2m、長径約4mの楕円形の範囲に土器片が検出される。

7月29日（木）

粘土採掘跡と推定される遺構検出を行う。粘質土は炎天のため、硬く反面、降雨にあうと粘着して作業は困難となる。

7月30日（金）

調査区中央の遺構検出を行う。

Pit 5より古銭、Pit 4より砥石、SK-4より砥石が出土する。

8月2日（月）

重機で粘土採掘跡No1を掘り下げ、地層断面観察をする。

8月4日（水）

粘土採掘跡No2より、口縁部直下の緑帯部に4条で区画文となる土器が出土する。

粘土採掘跡No2の底部より採取の目的とされた粘土、灰色粘土をサンプルとして採取する。

8月6日（金）

調査区西側の遺構検出を行う。

SK-1・2を検出する。

8月11日（水）

SK-5から矢羽根状文（綾杉文）が施されている土器片が出土する。

8月12日（木）

粘土採掘跡No2の遺物検出を行う。

8月17日（火）

粘土採掘跡No2の検出作業を行う。粘土採掘跡No2の底部から炭化物が出土する。

8月19日（木）

調査区東側の遺構検出作業を行う。

粘土採掘跡No2より粘土サンプルを2箇所採取する。

8月20日（金）

畝状（栽培作物の耕作土の痕跡）と思われる遺構より土師器を検出。

8月27日（金）

調査区南側の遺構検出作業を行う。

8月31日

器材を撤収し、発掘調査を終了する。

2 整理作業

整理作業は平成16年10月12日より、①中野広域シルバー人材センター事務所3階を作業所として、土器洗い、注記、遺物実測、遺物修復、遺構図、地層断面図、そしてトレースはそれぞれ並行して行ない、平成17年2月7日に終了する。

印刷は平成17年2月7日に入稿し、以降は校正と並行して遺物及び記録資料の残務整理を行う。

遺物・粘土サンプル・記録資料の総ては整理終了後、豊田村に移管する。



第二章 遺 跡

第1節 遺跡の位置と立地

1 位置と気候

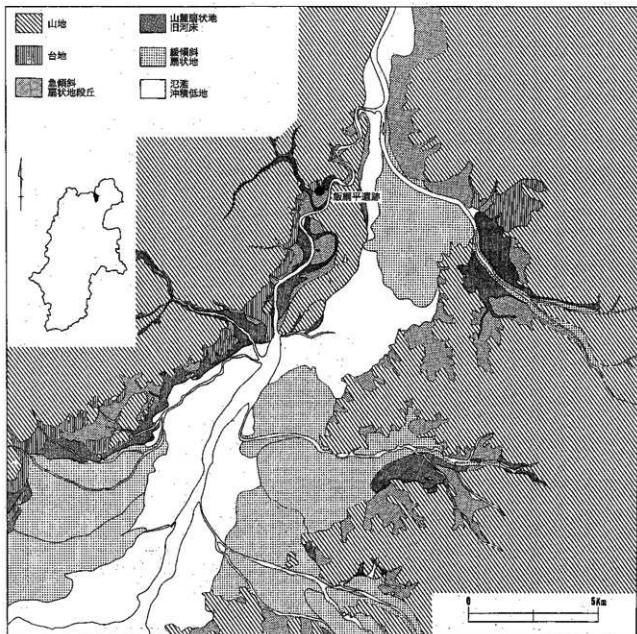
長野県下水内部豊田村（2005年中野市と合併予定）は、長野県の北部に属し、新潟県境にも近い。

北信五岳の一つ斑尾山（1381.5m）の東南部に位置している。行政的には北は飯山市、西は信濃町と三木村、東は千曲川を挟んで中野市と接して

いる。

長野盆地（善光寺平）の平地を流れた千曲川は、立ヶ花（中野市）から豊田村にかけて、丘陵間の狭狹部に入り蛇行している。このため豊田村と中野市の両岸付近の平地は、洪水に見舞われることがある。しかし、豊田村豊津の飯綱平遺跡はこの川面とは約40%高台にある。

この高台の平坦部は東西500%余、南北900%ある。標高は約363~380%で千曲川との比高差は約40%である。第一次の調査は約50戸の住宅団地造成のため、平成4年（1992）に3,500平方%を発掘



第1図 遺跡の位置

調査している。第二次の本調査地の標高は368.3mである。

今回の調査地は、前回の調査地の西北側（丘陵寄り）で、道路を挟んで西には豊田村中学校が存在する。

発掘調査面積は1,771平方mである。

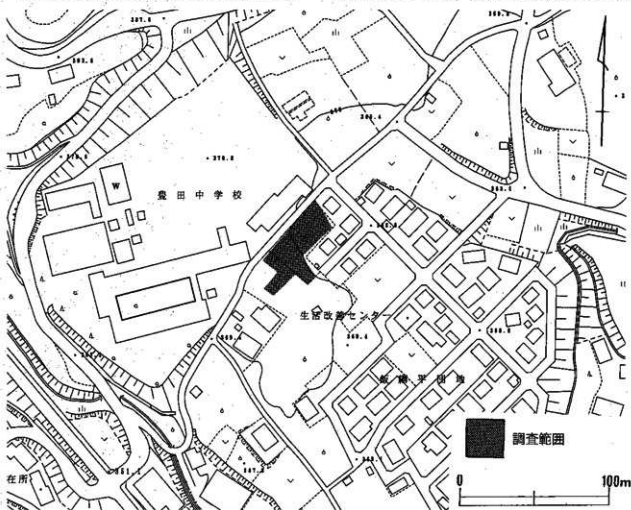
飯綱平からの眺望は、東方の下に千曲川が流れ、長丘丘陵を越えて、中野平から高社山近くに見て、志賀高原から菅平方面の上信越国境の山々が望まれる。南方には西をさえぎる標高600m級の山があり、裾に広がる平坦地には、千曲川が蛇行して流れている。そして、低い高丘丘陵を越して長野盆地が見え、遠く平の果てに姥捨山などの山を見ることができる。北方は奥手山丘陵から派生した尾根に遮られ、冬季は降雪量を少なくしている。

豊田村の気候の特色を記すと、冬季は北西季節

風が強く、寒気厳しく、降雪と曇天日数が多く、積雪量は隣接する飯山市より少ないが、相当積もることがあり、3～4ヶ月の冬ごもり期間がある。春の訪れは遅く、5月中旬でも遅霜の恐れがある。4～5月にかけては、著しく乾燥する期間がある。4～9月は雨量が比較的少なく、湿度も低く、乾燥性である。夏季の日中は高温となるが、朝夕は涼しい気候である。そして、秋たつことが早い。

豊田村はこのように気温の年較差と、日較差が大きくやや内陸性気候である。このように冬季は裏日本型気候で夏季は内陸性気候である。豊田村でも斑尾山に近い標高600～700mの所は、高冷地型気候である。そこに接する地域は降雪が多く、裏日本型の気候で、飯綱平遺跡を含む平坦地は内陸型の特色がある。〔豊田村誌〕(1963)

なお、飯綱平の地名は、この奥手山丘陵の最高所に元禄7年(1663)に建てられた石造の飯綱社



第2図 調査区の範囲

に由来している(注)。また、江戸時代には、飯山から善光寺に通ずる道は、この奥手山丘陵上を通っていた。

(注)現在はゴルフ場の東に安山岩の石祠がある。表に「敬白・奉建立替佐持・飯綱大明神御宝殿」、横に「維時元禄7己戌年5月吉祥日」と記され、中に狐像が2体(1体は破損)納められている。

2 立地

長野県の地質は複雑であるといわれている。それは本州の中央部が大きく陥没した時代があり、フォッサマグマ(糸魚川-静岡構造線)と呼ばれている。その後、火山活動などによって隆起し、陸化したものである。この時代に属する新生代(6,500万年前から現在)第三紀層(海成面・海成層)は、松本市北方から犀川沿いから飯山市に達している。

これに沿う形で分布している地層は新生代第四紀更新世(前期約180~70万年前、中期約70~12万年前、後期約12~1万年前)に属し人類の時代といわれている。これらの地層は、千曲川河畔地方に広がっている。

豊田村の地質は、高所から斑尾山の安山岩(火山岩)地帯、第三紀層地帯、第四紀洪積層地帯、第四紀沖積層地帯と分けることができる。

このうち飯綱平遺跡は、第四紀(更新世中期)洪積層地帯に属する丘陵である。この丘陵は千曲川の対岸(東方)に位置する中野市の長丘・高丘丘陵と同じ地層で、これらの丘陵が隆起しているのに対して、中野平などの沖積層地帯は沈下しているといわれる。このように千曲川はこれらの丘陵が、隆起を始める前から二つの丘陵間を流れ、下刻作用を行っているものとみられ、先行性流路と呼ばれている。このため豊田村の千曲川は蛇行(曲流)していること、峡谷をなしていること、急流部分があることなどの特色がある。

飯綱平(遺跡)は奥手山丘陵中にある。この丘陵の標高は516mで、頂部は比較的平坦でゴルフ場が造成されている。丘陵の西側は緩傾斜面で、赤褐色の砂質粘土の部分、青色粘土と赤褐色粘土

と丸礫の地層などがある。また、丘陵中には巻貝などの化石が発見されている。

また、組成粒子が細かい俗称「赤っぼ」とよばれる土や、「黒っぼ」とよばれる腐食質を含んだ黒土が表面を覆っているところもある。

飯綱平遺跡の土にも鉄分が多いところがあるが、明治初年(1872年ころ)にこの平の上部の赤坂地籍で褐鉄鉱を採掘して精錬場を設けて製鉄事業を行った『長野県町村誌』と記されている。

奥手山丘陵や長丘丘陵は、地質学的には若い地層といわれている。侵食の進んでいない平坦面が頂上部などに残っている。飯綱平遺跡面もその一つである。しかし、この平の北部には侵食の見られる谷地形のところもあり、道路が開設されている。

今回の調査地は飯綱平のやや西方に位置し、西側は豊田中学校の建設、団地の造成などによって原地形が損なわれている。尾根状に南にのびた緩傾斜面には樹園地などがあり、そこから次第に平坦面となっている。中学校の建設前には湧水箇所もみられたといわれるが、水利には乏しいところである(この項は『豊田村誌』などによる)。

第2節 土層の状態

1 土層の状況と基本土層

前節で述べたように飯綱平遺跡の地層は、海成面・海成層が隆起してできた洪積層からなっている。そして高台にあるため、腐植質に富んだ黒色の表土が深く堆積する状況にない。調査地点においても傾斜の上方(南側)の表土は、濃い黒色を示さず、下方(北側)の加曾利B式土器が多く検出された地点で、表土に黒色がみとめられた程度である。

しかし、総合的にはきわめて粘質の強い土壌で、Ⅲ層のふい黄橙色土以下は特に粘質をしめす。

A 1 グリットの大別した基本土層

I層 表土(耕作土) 暗褐色土(Hue10YA3/3)

Ⅱ層 遺構・遺物の包含層 鉄分粒1%を含む、黒褐色土(縄文時代~近代)(Hue10YR2/3)

Ⅲ層 鉄分粒10%を含む、ぶい黄橙色土 (Hue 10YR5/4)

Ⅳ層 鉄分粒10%を含む、褐色土 (Hue10YR5/1) この層に粘土探掘地点によって、灰白色土 (Hue10YR7/1) がある。

C7グリット付近はⅠ層からⅢ・Ⅳ層となり、灰白色土を含まない。また、全般に砂利層はみられないが、B5グリットの井戸状遺構には砂層がみられた。

第3節 飯綱平遺跡周辺の遺跡

1 豊田村と奥信濃の縄文後期の遺跡

長野県の縄文後期 (称名寺・堀之内・加曾利B式) とその後葉段階 (曾谷・高井東・安行Ⅰ・Ⅱ式併行) の遺跡は、中期に比較して少ないといわれている。この傾向は晩期にはさらに強まる。原因の一つに寒冷な気候が影響しているといわれている。したがって遺跡の規模も小さいものが多い。

豊田村では過去には、上記に該当する時期の遺跡発掘調査は行われていない。ただ県埋蔵文化財センターで行った上今井の風呂屋遺跡 (1998) から縄文中期土器などに交じって堀之内式併行の口縁に円文をもつ突起のつけられた小破片が検出されている。

発掘調査以外では、『豊田村誌』(1963)の神田五六氏の記述によれば、親川の黒岩仁助氏が発見された唐消縄文の注口土器、上今井の諏訪神社の周囲、みづなし、豊井学校グラウンド、北永江鶴田などから縄文中期の土器にまじって後期の土器片が発見されているが、晩期の土器は見られないとされている。

豊田村の遺跡調査が大きく進展したのは、県埋蔵文化財センターによる上信越自動車道建設に伴う発掘調査である。これは平成6年(1994)と翌年行われ、菲山・風呂屋・飛山・大谷地・八号・対面所の各遺跡が合計16,300㎡(契約面積)調査されている。しかし縄文時代後期の遺物が発見されたのは、風呂屋遺跡のみで少量であった。

さらに県埋蔵文化センターによって豊田村内の千曲

川築堤新設工事の伴う発掘調査が平成14年(2002)から行われている。千田遺跡(調査面積10,000㎡)からは縄文時代中期の遺構と、同後期の墓址群が検出されている。これは籽菜、飯綱平遺跡との関連が究明できる可能性がある。平成15年には同遺跡1,500㎡が調査され、縄文時代前期と古墳時代後期の遺跡が調査されている。同年関連で川久保遺跡(調査面積15,000㎡)も発掘調査され、縄文中期から古墳時代にかけての遺構・遺物が検出されている。今後、下流の堰込遺跡なども継続調査される予定で、報告書の刊行が待たれるところである。なお、県埋蔵文化センターによる栗林遺跡の調査(1992)で、縄文後期の加曾利B式土器ほかが出土している。

前記した縄文後期の長野県北信地方の遺跡数は69遺跡である。そのなかで加曾利B式土器の出土した遺跡と、明記されているのは26遺跡である。さらに晩期の遺跡となると14遺跡である。これらの遺跡のなかには該当する土器片が数片のみの遺跡もあるから、後・晩期の当地方の様相は著名遺跡を除いて不明な点が多い。

北信の縄文後・晩期の遺跡は前記のように希薄であるが、筆者の体験した野沢温泉村の岡ノ峯遺跡がある。内容に濃淡と欠落した時期が見られるが、草創期末から縄文晩期までの遺物が検出されている。中でも縄文後期の堀之内式から加曾利B式期にかけての資料がそろっている(野沢温泉村教委『岡ノ峯遺跡第2・3次発掘調査報告書』(1985))。

特に、岡ノ峯遺跡の加曾利B式とその後半の曾谷・安行Ⅰ・Ⅱ式(高井東式)併行の土器を参考としてみたい。加曾利B1式の精製土器は、炭化物が吸着した薄手の研磨された土器である。

第一段階 岡ノ峯遺跡の当該期は、深鉢形土器の文様は逆「の」字状の沈線文で、これが二つ組み合わされたもの。口縁内外に沈線、磨消縄文で加飾された土器も多く、口唇部は切り込みによって小波状になっているものがある(『報告書』以下報文100P)。これらは口縁部が内折した器形である。

深鉢・浅鉢形土器にみられる多条の沈線文（沈線帯）の土器も多く、口縁内外に施文され、最高11条のものがある。平行沈線が階段状に折れるか、切断した区切り文もある。（『報文』128Pほか）。また、口縁下などに三角枠の文様もみられる（『報文』126・127P）。

深鉢形土器の口縁に加飾されて耳状の把手は単独で単純である。その下の縄文帯のある弧線文の間に「()」または「S」形の文様が2段に組み合わせられ、中に刺突が加えられている。（『報文』124P）。この磨消縄文帯のみられるものまで、第一段階とした。

第二段階 前記の「()」状の文様が1段となり、結ばれる線も直線となり、縄文もなくなる。また、蛇行沈線文の土器もこの段階と思われる（『報文』122・同134P）。この蛇行沈線文の見られる土器は関東東部の椎塚貝塚（茨城県）、六通貝塚（千葉県）出土土器にも見られる（『縄文土器大成』3・後期91P）。ただし、134Pのものは横走で上に矢羽根状の沈線がみられるから、前者より後出的と思われる。

この矢羽根状沈線が太く整ったものが古いとおもわれるが（『報文』134P）、適当な資料がなく、斜格子文も同様である。

第三段階 この斜格子文が不規則となり、線の細いものもある。口縁の凹線の間に瘤が付けられ、下に斜行沈線がみられるもの（『報文』134・136P）。波状口縁が高く尖り、そこに斜行沈線が施される（『報文』136P）ものなどである。

深鉢の口縁部が内折し、口端部に付けられた瘤の周囲を沈線で囲み、瘤の間は平行沈線で結び、口縁部文様帯の土器（『報文』138P）や、直口縁で口端部に瘤の付けられる土器（同前）などがこの段階の土器とみられる。

第四段階 前の段階から傾向がみられるが、この段階には関東西部、東海、新潟などの影響とみられる土器があり、複雑である。尖った波状口縁の先端には円形の瘤の貼付があり、沈線を左右に垂下させ、間に蛇行沈線がみられるものは葎生（むぐらふ）遺跡（新潟県）にもある。口縁部が「く」字形に内折し、口端部が低い波状を呈し、その下に双頭の瘤が付けられ、屈折部に沈線が1条みられる粗製土器（『報文』138P）もこの段階と思われる。

また、粗製深鉢土器で口端部に合口状の突起、または小波状をつけたもの、または瘤付で、口縁下に付けられた隆帯に、連続して押捺を加えられた土器（『報文』148P）は、安行（埼玉県）I式併行とみられる。扇状把手の破片には異方向の斜行沈線などがみられ、高井東式の影響の土器で、縄文後期末葉の土器とみられる。（『報文』130P）

以上は、長野県の東北端に位置する、野沢温泉村岡ノ峯遺跡の縄文後期に属する土器を概観した。飯綱平遺跡出土土器の編年などの位置付を理解するために記した。

このように北信の縄文時代後・晩期の研究は、遺構・遺物の数が限られており、著名遺跡での再検討をはじめ、今後の課題が多く残されている。

第1表 北信の縄文後期遺跡数（『長野県史・遺跡地名表』1981年に追加した）

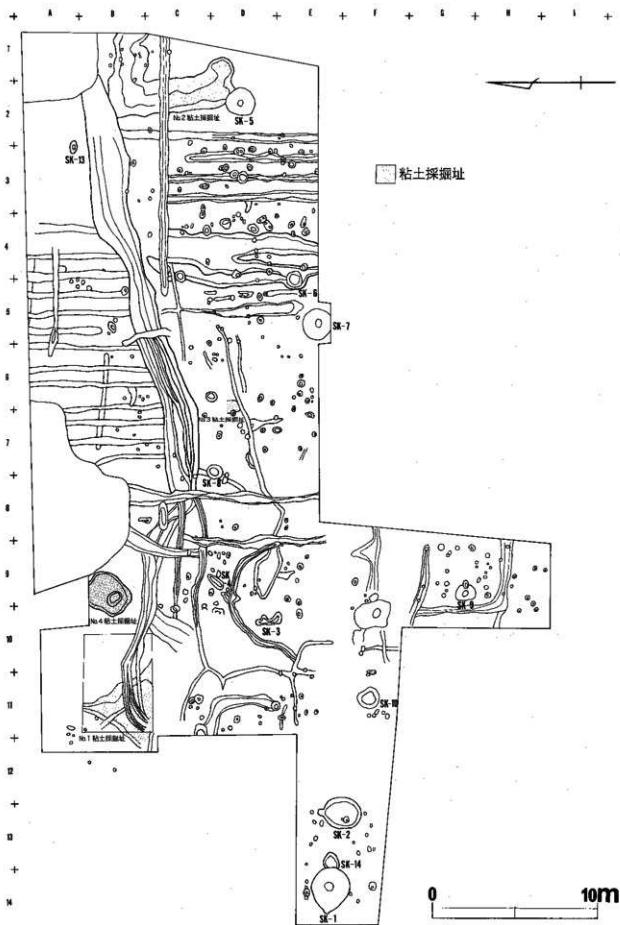
市町村名	遺跡数	市町村名	遺跡数	市町村名	遺跡数	市町村名	遺跡数
栄村	1	信濃町	6	戸隠村	1	阿倍・笹ノ井地	2
豊田村	2	牟礼村	5	鬼無里村	1	同松代地区	2
飯山市	6	三水村	1	小川村	1	更埴市	2
野沢温泉村	2	高山村	4	中条村	1	大岡村	1
木島平村	2	須坂市	3	信州新町	4	上山田町	3
山ノ内町	2	小布施町	—	長野市	8	戸倉町	2
中野市	3	豊野町	2	同若穂地区	2	坂城町	1
合計69遺跡							

（注）市町村名は平成16年（2004）9月現在



- 1 飯綱平遺跡 2 五里久保遺跡 3 山根遺跡 4 田上・寺の跡遺跡 5 毛見遺跡 6 風呂屋遺跡 7 南大河遺跡 8 鉾が沢遺跡
9 栗林遺跡

第3図 周辺の縄文後期の遺跡



第4図 遺構配置図

第三章 遺構と遺物

第1節 縄文時代

1 遺構の概要

本調査区で確認された縄文時代の遺構は粘土探掘址のみであった。掘り方に連続性が認められる4箇所とグリットC・D・E-3・4に柱穴状で単一な粘土探掘址と思われる遺構が多数みられた。

No1・2・4 粘土探掘址は調査当初、不整形な黒褐色土の落ち込みに加倉形B式土器が散らばる、土器だまりの様相を呈していた。

調査の結果、遺構覆土全体に土器が含まれ、特に黒褐色土とその直下層に多く含まれていた。土器の組成の違いからNo1 粘土探掘址とNo2 粘土探掘址の時間差が推定される。

地層観察ではNo2 粘土探掘址でみられた褐灰色粘土層がNo1 粘土探掘址では見られず、黄褐色粘土層と灰黄褐色粘土層を掘りこんでいる。No2 粘土探掘址とでは褐灰色粘土層を掘りこむ違いを見せている。このことから目的粘土はNo1 粘土探掘

址では黄褐色粘土と灰黄褐色粘土、No2 粘土探掘址では褐灰色粘土と推定される。

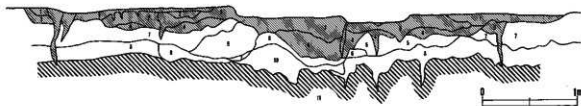
粘土探掘期間は粘土探掘坑を一定期間放置したのちに、探掘を再開するような状況を示す、自然堆積の間層は認められないため、短期間に連続して粘土探掘したと推定される。

調査区内では縄文時代の遺構は、粘土探掘址のみで他の遺構は検出されていない。

2 遺構（粘土探掘址）（第5・6図）

始めに粘土探掘址の特徴を概観し、粘土探掘址とした根拠について触れておきたい。

- (1)自然堆積層で、認められる粘土層が抜け落ている。
- (2)底部分に断面U字状を呈したバケツ状の落ち込みがある。
- (3)踏み固められたテラス状の堆積層が認められる。
- (4)堆積状態に規則性が認められる。
- (5)堆積層にブロック状の層が認められる。
- (6)探掘目的粘土が二次堆積土に含まれない。
- (7)平面プランが不整形である。
- (8)プライマリーな断面がオーバーハング状を示す。



- 1層 Hue10YR3/2黒褐色土に鉄分粒が1%混じる。土性C L
- 2層 Hue10YR3/3暗褐色土に鉄分粒が20%混じる。土C L
- 3層 Hue10YR6/3に、おい黄褐色土にHue10YR2/2黒褐色土が5%、鉄分粒が15%混じる。土性L S
- 4層 Hue10YR4/2灰黄褐色土に鉄分粒20%混じる。土性C L
- 5層 Hue10YR5/8黄褐色土にHue10YR3/2黒褐色土が塵に10%、Hue10YR6/1褐灰色土がクラック状に5%。土性S C
- 6層 Hue10YR6/2灰黄褐色土にHue10YR7/8黄褐色土とHue10YR7/1灰白色土のブロックが20%。土性S C
- 7層 Hue10YR6/6明黄褐色土にHue10YR7/8黄褐色土が20%、鉄分粒が1%。土性S C
- 8層 Hue7.5YR5/8明褐色土にHue10YR4/1褐灰色土とHue10YR6/6明黄色褐色土がクラック状に10%入り、Hue2.5YR3/2暗赤褐色土が1%混じる。土性H C
- 9層 Hue10YR5/6黄褐色土にHue10YR5/1褐灰色土がクラック状に10%、Hue10YR2/1黒色土2%と鉄分粒（Hue10YR2/3黒褐色土）が1%混じる。土性H C
- 10層 Hue10YR6/6明褐色土にHue10YR4/1褐灰色土とHue7.5YR4/6褐色土がそれぞれ5%混じる。土性H C
- 11層 Hue7.5YR6/8明褐色土にHue7.5YR暗褐色土が15%、Hue10YR4/1褐灰色土とHue10YR6/6明黄褐色土がクラック状に10%入る。土性H C

第5図 No1 粘土探掘址地層断面図

№1 粘土探掘址 (第7図)

№1 粘土探掘址の検出面でのプランは長軸約3 $\bar{\text{m}}$ 、短軸約2 $\bar{\text{m}}$ の楕円形を成し、覆土には土器破片が含まれ、土器溜まりの様相を呈していた。また、土器片が散発的・広範囲に各層から検出された。

粘土探掘№1では(2)と(3)、(7)は確認できなかったが、堆積状態が不規則で堆積土層が2層の黒色土を底状に含む層を形成し、5・6層を掘り込むなどから粘土探掘址とした。

粘土探掘作業方向は北側では壁面が緩やかな形状を示すこと、オーバーハング状を呈していないことから北側から掘り始め、南側と掘り進んだと推定される。

工期の都合上、粘土探掘跡範囲の全容の確認まで至らなかったが、一部の掘込みまでを確認し、その後、重機によるトレンチ掘りを行い、地層断面観察をした。探掘粘土と推定される、5層の黄褐色粘土と6層の灰黄褐色粘土、その下層の7・8・9・11層からも後日資料としてサンプル採取した。

№2 粘土探掘址 (第7図)

№2 粘土探掘址の検出面でのプランは長軸約6 $\bar{\text{m}}$ 、短軸約2 $\bar{\text{m}}$ の長楕円形を成し、粘土探掘址№1と同じく覆土には土器を含む、土器溜まりの様相を呈し、覆土内の土器片のあり方も№1粘土探掘址と同じであった。

遺構形状は粘土探掘址№1で見られなかったプライマリー層へのフラスコ状掘り込み、底部にバケツ状の掘り込みなどが確認された。

粘土探掘作業方向はグリットD-2の南から掘り始め、東北へ進み、グリットD-1でプライマリーな隙面にフラスコ状の掘り込み残した後、北側に方向を修正、グリットB-2中央付近まで掘り進み、フラスコ状の掘り込みを残した。その後、東側に方向を変え、東側調査区区域外に掘り進んだと推定される。

№2 粘土探掘址の範囲は調査区外まで及び、その全体像は確認できなかった。作業単位などの確認は、地層断面観察を詳細に行ったが、明確には

できなかった。探掘粘土と推定される16層の褐灰色粘土をサンプルとして2箇所採取した。

№3 粘土探掘址 (グリットD-6・7)

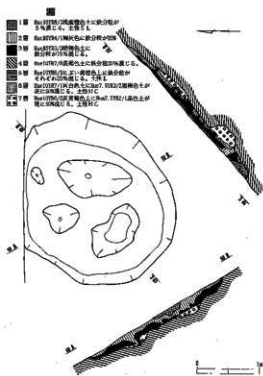
工期の都合上、全掘はできず。全体像はつかめていない。地層断面観察で粘土探掘跡と判断した。

遺物検出はなし。

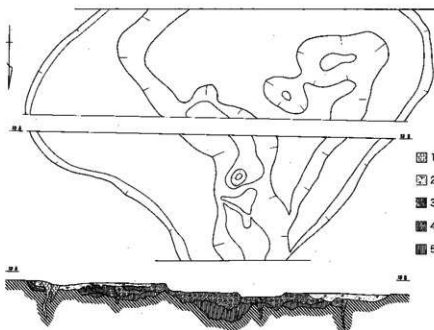
№4 粘土探掘址 (第6図)

№4 粘土探掘址は検出面のプランが径1.5 $\bar{\text{m}}$ の円形をなし、他の粘土探掘址と同じく覆土に土器破片が含まれ、土器溜まりの様相を呈していた。掘り込みは長軸90 $\bar{\text{m}}$ 、短軸50 $\bar{\text{m}}$ 、検出面から深さ約30 $\bar{\text{m}}$ の円形。で単一の作業単位と思われる。

遺物量は少なく、無文土器が殆どで、沈線がある土器片が2点確認されるのみである。土器が№1粘土探掘址と類似するため、№1粘土探掘址と同時期に探掘された遺構と思われる。

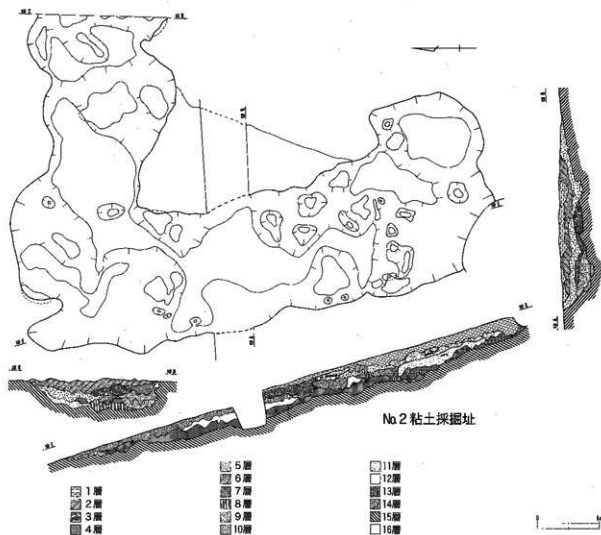


第6図 №4 粘土探掘址



- 1層 Hue10YR3/2黒褐色土に鉄分粒が1%混じる。土性C L
- 2層 Hue10YR3/3暗褐色土に鉄分粒が20%混じる。土C L
- 3層 Hue10YR5/3にぶい黄褐色土にHue10YR2/2黒褐色土が5%、鉄分粒が15%混じる。土性S
- 4層 Hue10YR4/2灰黄褐色土に鉄分粒20%混じる。土性C L
- 5層 Hue10YR5/1灰黄褐色土にHue10YR5/3明黄褐色土が1%、鉄分粒2%混じる。土C L

No.1 粘土採掘址



No.2 粘土採掘址

- | | | |
|----|-----|-----|
| 1層 | 5層 | 11層 |
| 2層 | 6層 | 12層 |
| 3層 | 7層 | 13層 |
| 4層 | 8層 | 14層 |
| | 9層 | 15層 |
| | 10層 | 16層 |

第7図 No.1・2粘土採掘址

3 遺物

土器 (第7～13図)

出土した土器は加曾利B式土器と、それに後続するこの地方の土着の土器である。破片資料だけで、器種の全容が知られる土器は存在しない。したがって深鉢と浅鉢の識別も確定的ではない。さらに高水地方での当該期の遺跡の調査例は限られている。今後の資料蓄積によって検討されることが望まれる。

1 口縁部に加飾(突起)のある土器(第7図1～10・12) おもにNo2粘土採掘址から検出された土器。

A 1は口縁部が低い波状を呈する胴部から外反する器形の深鉢と推定される。波頂部右に瘤を隆起させ、上に沈線を横走に入れ、横面に円形の刺突を入れている。接続して大きい円形(耳状)の突起が斜めにつけられ、中央を円形(盲穴)にえぐられている。その下に接続して小さい同じ文様があり、「8」の字形をしている。これは先行する耳状の突起の把手から変化したものと思われる。

外面の口縁下には区切り文がある。内面の口縁下には隆帯があって段状をなし、凹みに円形刺突が巡らされている。その下には沈線が施している。

B 2は外傾した器形の、低い波状の口縁である。口端部は内傾し、口唇部は薄く丸い。波頂部の瘤は(A)より大きく横定に3本沈線を入れている。接続する耳状の突起(盲穴)は大きく中央をえぐられているが、その他の付加物はない。口縁下文様帯は右傾に縄文を施して5条の沈線で磨消し、その後、縦に4箇所斜めに区切りをいれている。次の区切り文まで約10°素文で、円周約60°の土器と推定される。下部は無文とみられ、内面の口縁下には隆帯があって段状となり、奥壁は凹線状で、刺突文はない。下に凹線状の沈線が5条みられる。器色は黒褐色～赤褐色である。

C 3は緩い波頂に加飾された土器、右の瘤は合口(蛇口)状を呈している。しかし左は欠落して不明である。口端は内折している。外面は口縁下に右傾縄文を施し、沈線が施されている。加飾

の下は逆「の」状に描かれ、横縦方向に結ばれている。口端部まで伸びている沈線もある。

内面の隆帯の上の凹部には、刺突文が巡り、右方向から斜めに施されている。下に凹線状の沈線がある。外暗褐色、内赤褐色の器色は、前者と同一である。

12は、BとCとの同形・小型な口縁部加飾片である。そして加飾の下には焼成前につけられた釣手用と思われる貫通孔がある。

D 4は器面が剥落している。口縁部の加飾は、Bと同じと思われる。口縁が内折し、下の右傾縄文帯に3条施されて、区切られている。内面の段状の凹線は浅く、下に沈線が4条認められる。

E 5は内外暗褐色し、やや外傾した器形で、口端部は内傾している。加飾部の右は欠落して不明である。斜状の円形(耳状)突起は中央が円錐形(盲穴)でえぐられている。内面にもえぐられた部分がある。この口端部の円形突起の下には小さな瘤がある。外面の内折した上と、瘤と円形突起の間から沈線が横に描かれている。その下の沈線は5条ある。

薄くなっている口唇部に内側から連続した押捺が加えられている。内側の口縁下は凹線状で、間をおいて沈線が4条みられる。

2 口縁部に加飾(突起)が見られないもの(第7～10図13～41・49・58・59・73～79・82・83・90)

資料は破片のため、加飾された突起間の破片の可能性がある。

A 13はやや外傾した器形で胎土は赤褐色している。口縁は内傾して屈折部から下が文様帯である。右傾の細い縄文を3条の沈線で磨消しているが、区切り文は「L」状に引かれている。内面の口縁下は凹線状で、素文帯の下に沈線が4条見られる。

B 14は暗褐色の直立に近い器形と思われる深鉢である。口縁部は段をつけて内湾している。口唇部には連続した押捺が見られる。段から下に空白部があり、下に6条の沈線がある。そこに段ごとに後退する区切り文がある。内面には突帯があり、その上は凹線状である。下に4条の沈線がある。

C 83は暗褐～黄褐色の直立に近い深鉢である。口縁部は器面から内湾し、平口縁かは不明。外面は凹線状の浅い沈線4条、離れて下に1条ある。

D 98は明褐～暗褐色の口縁が「く」字形に内折した器形の破片である。口唇部には刻みを入れて小波状のようである。外面は屈折の上に沈線が1条ある。下は空白部があり4条の沈線で区切り文で、縄文は見られない。内面は段の奥は凹線状で下に沈線があるが剥落して線は確定できない。

E 16は黒褐～暗褐色の器厚0.4ㄱ前後の推定直径20ㄱの深鉢と推定される。口縁は器面から内折している。加飾の有無は不明。外面の口縁下に沈線が4条あって、細い縄文を磨消している。また区切り文も見られる。

内面の口縁下は隆帯となり、凹部には刺突文が巡っている。下の沈線は4条である。

F 17は口縁部が失われて不明。器色は16と同じである。外面には2条の浅い沈線が見られる。(下の空白は発掘時の疵)内面には凹線状の沈線が4条ある。

G 19は器厚が0.4ㄱで磨研され明褐色した土器である。やや外傾した直立の器形である。口縁部は僅かに内折している。薄い口唇部には刻みがある。外面の口縁下に沈線が4条あり、刻みが3か所入れられている。

内面の口縁下に隆帯があり、上に刺突文が連続している。隆帯の下の沈線は4条である。

H 20は口縁部が破損している。暗褐色の器色のほか土器の属性は19と同じである。外面の口縁下には沈線があり、右傾縄文があるが明瞭ではない。内面の隆帯下の沈線は2条である。

I 21は器形が前2者と同じであるが、口唇部は破損している。明褐～暗褐色の土器である。外面の口縁下に右傾縄文があり、3条の沈線で磨消している。内面は内折した口縁下は緩い稜線で隆帯は低い。その下の沈線は4条である。

Aと属性が同じで同体である。

J 10・12は器厚が0.6ㄱで器色などの属性は前者と同じである。ただ器形は大きいと推定される。口唇部は欠けているが内折し、外面下で段状をし

ている。無文帯があって右傾縄文があり、5条の沈線で磨消している。

内面の内折した下は隆帯をつくるが、凹みに刺突はみられない。下の沈線は5条である。この土器は13のように緩い波状口縁の土器の可能性もある。

3 口縁部に隆帯のある土器(第9図56～57)

A 56は器厚が0.7ㄱで明黄褐色の土器である。口唇部は平坦で、わずかに外傾している。外面の口縁下に幅1ㄱの隆帯を付加し、上に押捺を加えている。以下は無文のようである。内面は口縁下に1条の沈線がある。

B 57は口唇部がカマボコ形のほか、56と属性は同じである。検出は2片のみである。

4 口唇部に刺突文のある土器(第8・9図31～33・36～38・57・58)

A 58は器厚が0.7ㄱで、黄褐色の土器である。口唇部全体は内傾しているが、そこに刺突が巡らされている。内面の口縁は額縁状になっている。外面は口縁下に沈線が「つ」字状などに施され中に磨消縄文があるが、小破片のため全容は不明である。

5 沈刻文の土器(第7図11、第9図59～61)

A 59は暗褐～灰色の土器である。口縁部の破片で、外面から内側に傾斜し、内面からわずかの傾斜で口唇部を造っている。内面に文様はない。外面にヘラ状の工具で沈刻した文様である。上下の沈刻の間の中央に三角状の刻みをつくり、斜状に左右に刻んでいる。頸部から下は縦線の文様帯となるらしい。矢羽根状文(綾杉文)の系統の土器と思われる。11は把手の破片である。把手の下の刻みや属性からこの59の土器と同体で、やや大きい注口土器となるらしい。

B 60は59の胴部破片と推定される。文様は浅深の沈刻(線)4条ほどが十字?に交差している。

C 61は59より、大きく59とは個体の違う壺形土器である。推定口径8ㄱ、胴部径20ㄱの大きさと推定される。灰褐色を呈しやや脆い土器である。口縁形態は59と同じで、内面は無文だが、口縁下に折れがある。頸部から大きくふくらんでいるが、底部は欠落して不明である。

口頸部の沈線の文様は横走や斜走がみられるが明瞭ではない。胴部上には交点が明瞭な縦位の矢羽根状の沈線がある。左右の線は角も連続して描かれている。

D 62は胴部の破片で属性は59と同じである。矢羽根状の沈線が横走している。

E 63は同じく胴部の破片で、属性も62と同じである。上下の沈線間に左斜走の沈線が描かれている。

6 凹線文などの土器（第9図67～71・73～80）
以下は粘土探掘址No1などから検出した土器である。前述した土器より後出の土器と認められる。

A 67は砂粒が多く軟質で、灰褐～赤褐色の土器である。器厚は0.8%と厚い。口唇部は内面に円く傾斜し、肥厚している。外面の口縁に右傾縄文があり、下に凹線が2条あって、下は無文となる。

B 68は石英粒など砂粒の多い、黄褐色の軟質の土器である。内面には炭化物が付着している。器厚は0.5%で、口唇部は内側に傾斜し、肥厚している。口端部がカーブしているので、波状口縁になると思われる。外面の口縁部は内面にカーブしている。文様は太い沈線が口端に沿って曲線を描き、下に逆「S」字状、断絶のある沈線などを描いている。

C 69は口縁形態が68と同じで、器厚は0.6%で暗褐色の堅い土器である。外面のカーブした所に凹線が3条と、その下に沈線がある。浅鉢の破片かと思われる。

D 70は69と器色などは同じである。器厚は0.5%で内面に傾斜した口唇部は、端部で肥厚している。外面の口縁下に凹線が3条見られる。

E 71はやや尖った波状口縁の破片である。口端部の形態や属性が69と同じである。外面の凹線は2条1組で「人」状に描かれている（一状の沈線は発掘時の疵）。

F 72は破片で剥落の部分があり、判別しにくい。71と同じ波状口縁の破片である。中央に乳頭状の瘤があり、左右に凹線が2条ある。

G 74は推定口径20%を超える深鉢の破片である。厚さは0.5%で内に傾斜する口唇部などは、70と同じである。表面の口縁下には凹線が3条斜

めに走り、下には逆方向に2条見られる。

H 75は平口縁の深鉢で、黄褐色の脆い土器で、器厚は0.5%である。口縁は70と同じである。表面は剥げて判別できないが凹線文の土器である。

I 86は内面のカーブからみると、口縁部に近い破片である。器厚0.8%の赤褐色の土器で、長さ2.5%、幅1.3%、高さ0.7%の瘤がつく、上には凹線状の沈線が2条ある。

7 矢羽根状文の土器（第9図74・75 第10図82～97）

ととのった矢羽根状（緩杉状）の文様の土器はない。それより便化したものだけである。

A 82は胴上半部が丸く開いた深鉢と推定される。口縁径は約25%と推定される。黄褐色の脆い土器である。口縁部は68と同じである。外面の口縁下に凹線が4条ある。下に沈線2条が段違いに斜めに連続させている。間に素文帯があって、下の文様は前者と逆方向に描かれている。83・84も同じ個体である。

B 88は口縁部が失われた深鉢形土器である。器厚は0.7%で磨研された赤褐色の土器である。外面の口縁下に沈線で82・83と同じ手法の文様が見られる。85も同じ文様の土器である。

C 87は土器が脆くはつきりしないが、暗褐色した波状口縁の破片と思われる。外面の波頂部から縦に突帯がつけられている。下は内面に大きくカーブしている。

8 土器底部の網代などの圧痕（第11～14図）

縄文時代の後期を中心とした時代に土器の底部には、網代の文様が見られる。とくに加曾利E式～安行式（佐野式）の土器に顕著にみられる。該当する本遺跡の加曾利B式から後続する土器もその範疇にある。

網代痕は北信の本遺跡の周辺の岡の峯遺跡（野沢温泉村）、佐野遺跡（山ノ内町）、湯倉洞窟遺跡（高山村）などの報告書を参考として考察し、さらに山本直人「石川県におけるワラ・タケ以外の籠籠」〔北陸の考古学Ⅱ〕1989）からも引用して観察してゆきたい。

湯倉洞窟（綿山2001）では網代痕355点が調査さ



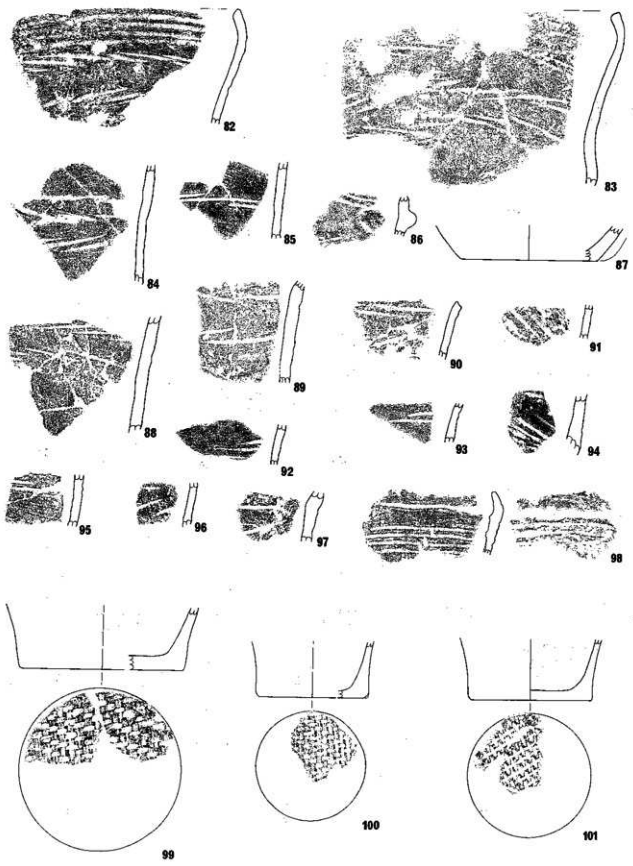
第8図 後期縄文土器(1)



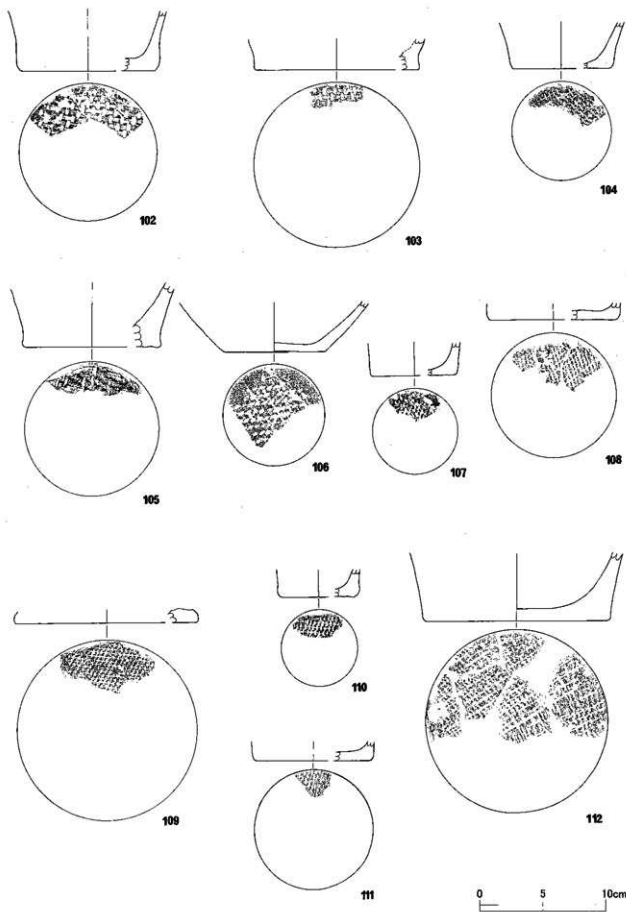
第9圖 後期銅文土器(2)



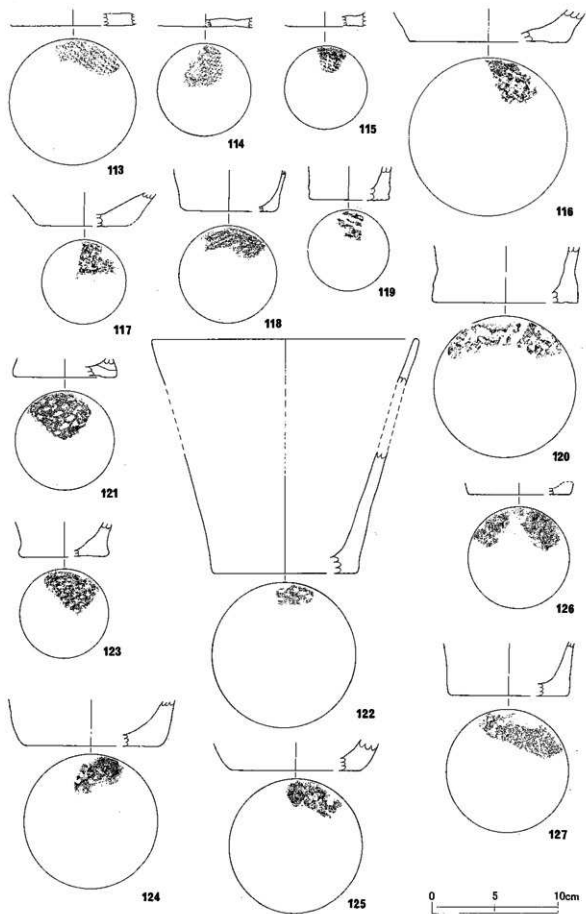
第10圖 後期縄文土器(3)



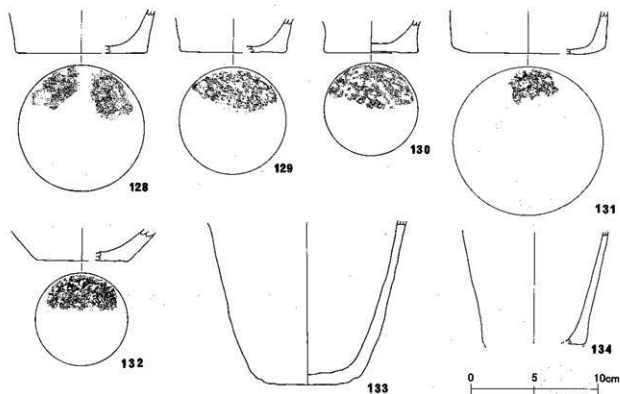
第11圖 後期縄文土器(4)



第12図 後期縄文土器(5)



第13圖 後期繩文土器(6)



第14図 後期縄文土器(7)

第2表 飯網平出土の土器底部の網代痕観察表

番号	分類	実測番号	原体の最大幅	出土位置	推定原料	年輪痕	形状
1	1	101	3 ³ / ₄	No2	マクタビなどの蔓	—	半円形
2	1	99	4	◇	檜・ササ(タケ)などの薄板	あり	平板
3	1	100	3	◇	◇	◇	◇
4	1	102	2.5	◇	◇	◇	◇
5	1	103	2.5	◇	◇	◇	◇
6	1	104	1.5	◇	◇	不明	◇
7	1	105	2	◇	◇	◇	◇
8	1	106	2.5	◇	◇	◇	◇
9	1	107	1.5	◇	◇	◇	◇
10	1	108	◇	◇	◇	◇	◇
11	2	109	◇	◇	◇	◇	◇
12	2	110	◇	◇	◇	◇	◇
13	2	111	◇	◇	◇	◇	◇
14	2	112	◇	◇	◇	◇	◇

15	3	113	2	◇	◇	◇	◇
16	—	114	—	No2	薄板	不明	平板
17	—	115	—	◇	—	◇	—
18	—	116	—	◇	—	◇	—
19	—	117	—	◇	—	◇	—
20	—	118	—	◇	—	◇	—
21	—	119	—	◇	—	◇	—
22	—	120	—	◇	—	◇	—
23	—	121	—	◇	—	◇	—
24	—	122	—	◇	—	◇	—
25	—	123	—	◇	—	◇	—
26	—	124	—	No1	—	◇	—
27	—	125	—	◇	—	◇	—
28	—	126	—	◇	—	◇	—
29	—	127	—	No2	—	◇	—
30	—	128	—	◇	—	◇	—
31	—	129	—	◇	—	◇	—
32	—	130	—	◇	—	◇	—
33	—	131	—	◇	—	◇	—
34	—	132	—	◇	—	◇	—

れている。網代の分類では越える数の多い方向を緯（よこ）とみると、第1類「2本越え、1本潜り、1本送り」が94点の88%を占め、第2類「2本越え、2本潜り、1本送り」が9点となっている。（以下省略）。

山本（1989）は石川県の真脇遺跡（能都町）ほかのカゴ類などの植物遺体の縄・編み物などを考察している。「底中央から放射状に広がる条を経（たて）状、それを絡みながら同心状の条を緯（よこ）状としたカゴ底の土器匠痕の編み物の材料の同定では、ヒノキ、戸水C遺跡のカゴの材質は、コツラ（マタタビ）の蔓とされている。タケ（マダケ・ハチク・モウソウチク）類の使用は弥生時代後期を上限とされている（渡辺誠1985）。ただし縄文時代晩期のとの説もあり、タケ・ヨシなどが原料といわれている。

また、石川県の民俗例として、ヒノキ笠を作るヒノキは、丸太を放射状に割って柁目どりし、次第に薄く小さく裂いて編む材料を作る。編み方は緯（アヤ）編みで「2本越え、2本潜り、1本ずれ」である。編む時は材料に湿り気が必要である。

コツラ（マタタビ）細工の原料は、マタタビが1年でびたところがよく、切つてやると毎年よい蔓がでるといふ。四つ割にして蒸してから皮をむく、編む時は水につけて行く。このように加工するには、ヒノキもマタタビも湿り気が必要で、加工は冬季の北陸型気候で、積雪地帯が適している。

この民俗例は北信地方でも適用が可能で、参考例となる。ササ・ネマガリダケ（チシマザサ）などの竹類を原料とした場合の加工は、本遺跡でも検出された黒曜石などのフレークが適当と思われる。飯綱平遺跡の網代痕の分類は、本数が多い方を緯（よこ）とする。

- ① 1本越え、2本潜り、1本送り
② 2本越え、2本潜り、1本送り
③ 雑（まじ）り編み
④ 不明瞭
（第2表参照）

石器（第15図1～9）

石刃フレーク

1の1点がNo1粘土探掘址覆土下層より出土する。長径5.2 ϕ 、幅2.2 ϕ 、厚さ約0.8 ϕ を測る。先端部側が欠損している。縦長に素材剥離されたフレークは1条の稜線をもち、基部に左右斜めからの押圧剥離による調整が施されている。側縁部には使用痕と思われる剥離がある。

敲石

4、5の2点が出土する。5はNo2粘土探掘址内の覆土下層から検出されたため縄文時代とする。4は耕作土内から検出されたため、時代は特定できない。

4は長径約15 ϕ 、短径7 ϕ を測りスタンプ状を成す。平らな面に、より強い磨耗痕を呈する。

5は長径約12 ϕ 、短径約6 ϕ を測る。楕円形。両先端部に使用痕が観察される。

凹石

7～9の3点が出土する。9はNo2粘土探掘址底部から検出されたため縄文時代とするが、7・8は耕作土から出土したため、時代は特定できない。

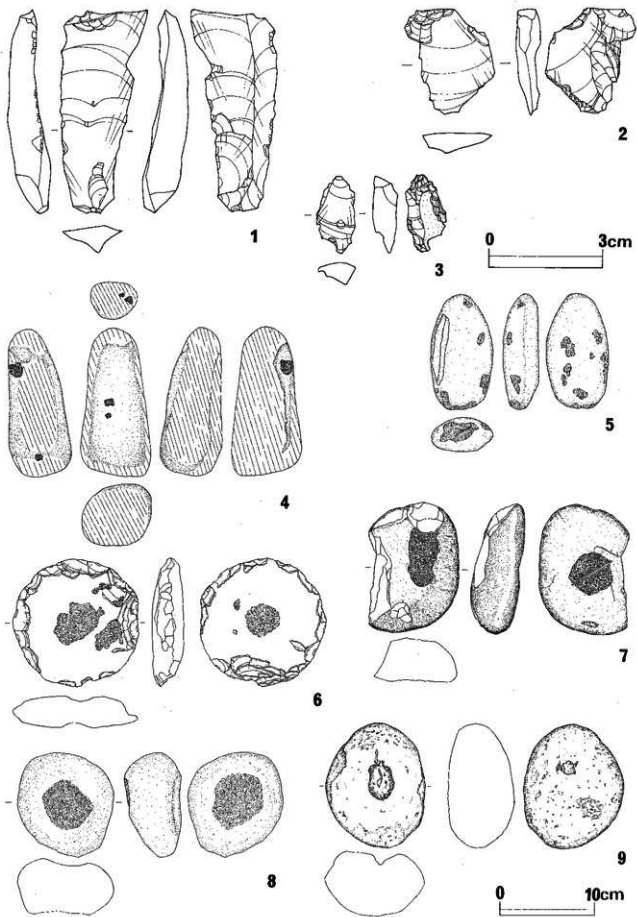
8は長径11 ϕ 、短径約9.5 ϕ 、厚さ6 ϕ を測る、やや円形状を成す。表裏に凹みがあり、長径6 ϕ 、短径5 ϕ 、深さ0.6 ϕ と正反面に長径4.5 ϕ 、短径3.5 ϕ 、深さ0.4 ϕ を測る凹みが施されている。

7は長径12.5 ϕ 、短径約10 ϕ 、厚さ約6 ϕ を測り凹形を成す。凹みは両面にあり、片面は自然面を利用した凹である。正反する凹は中央よりずれ径1.5 ϕ 、深さ0.4 ϕ を測る。

9は長径約13.5 ϕ 、短径8.5 ϕ 、厚さ4.2 ϕ を測り台形を成す。凹みは片面で3箇所施される。一部に打製剥離がみられる。自然の凹みとも考えられるが凹石とした。

異形石器

6（円形周縁調整凹石）は径約13 ϕ 、厚さ3.6 ϕ を測り、円形を呈する。一部自然面が残る周縁は、打製剥離により刃状につくられ、円盤状を成す。中央の正反する部位には径約3 ϕ 、深さ約0.5 ϕ を測る、細かい敲打による凹みが施されている。器面には被熱を受けた赤色と黒色の着色が見られる。形状は穿孔がない環状石斧石器に類似する。



第15圖 石 器

時代は耕作土内で出土したため特定はできない。

剥片

黒曜石の剥片2・3が2点、チャート系の剥片が2点、畝状遺構の覆土内から出土した。

第2節 平安時代

1 遺物

平安時代の須恵器片(第17図1~8、第4表1~8)が8点出土した。9~10世紀代の須恵器である。表面に叩き具の痕跡があり、内面は当て具痕でゆるいくぼみ凹凸がある。硬い焼成のものが多い。器種は甕が多いのは、水利に恵まれない高台に生活する人々の一面をあらわしている。推定した壺は小片のため詳細は不明である。

本村の上今井や高丘丘陵には、須恵器焼成窯が多くみられるので、供給源や関連が注目される。

第3節 中世

1 遺構

井戸(第16図、第3表1~3)と水溜(第16図、第3表4~6)

前記したように飯綱平遺跡は高台に位置するため、水利は不便である。発掘調査面積が狭かった割合には、井戸または水を溜めたと思われる跡(土坑)が検出されている。

中世の東国では素掘りの井戸が主体といわれている。平坦地で湧水がなく、植物栽培用の水がないところが該当する。

中世の井戸特有の形態として上部が漏斗(じょうご)状に広がり、深さ3~5 m で、下部は円筒形が一般的といわれる。また足掛けがつくものもある。これらを参考として構築された時期を問わないで、项目的に類例を記す次のようである。

①円形ないし不整形の素掘りの井戸址、比較的急角度の傾斜をもつ、深さは2 m 以下で半球状の断面をもつものもある。

②円形を呈する大型の素掘り井戸で、上面は楕円形で、傾斜が次第に緩くなる。下方は垂直に掘り込まれる中世特有の形態の井戸。

③円筒形の掘り方の内部に桶形を数段重ねた井戸

側を持つ井戸址。

④円筒形・方形で石組みの井戸。

⑤円筒形・方形で切石積みの井戸

(注)その他の形式の井戸は省略した。

SK-1は②の形式に該当する。埋没土中に小石、北側の7層の黒褐色土中に炭化物が検出されたのみで、井戸の形式はともかく年代を決定する資料はない。

SK-11は①または③の形式に該当する。埋没土のなかに直径30 cm の石などがあり、底辺には水が溜まっていた。下層の砂利層からの湧水とみられる。この底辺から第18図6に示す曲物の残欠ほか検出された。そして空間が狭いこと、泥のため完全に発掘することができなかった。構築された時期は中世の可能性はある。

SK-7は小形な石組みの井戸である。使用されている石は、普通川原石と呼ばれているものである。断面は掘り方、石積みともにV字形を呈している。石積みの中から平安時代の大量の口縁部(第17図2)が検出された。しかし構築された時期は、中近世以降の可能性はある。

SK-6・10・14は水溜めまたは肥溜跡の可能性はある。粘土探堀址とは、整った円形などに掘られているため区別した。SK-4はSK-1に接続し、水桶が据えられた跡ではあるまいか。SK-6・10の所属時期は確定できない。

土坑(第16図)

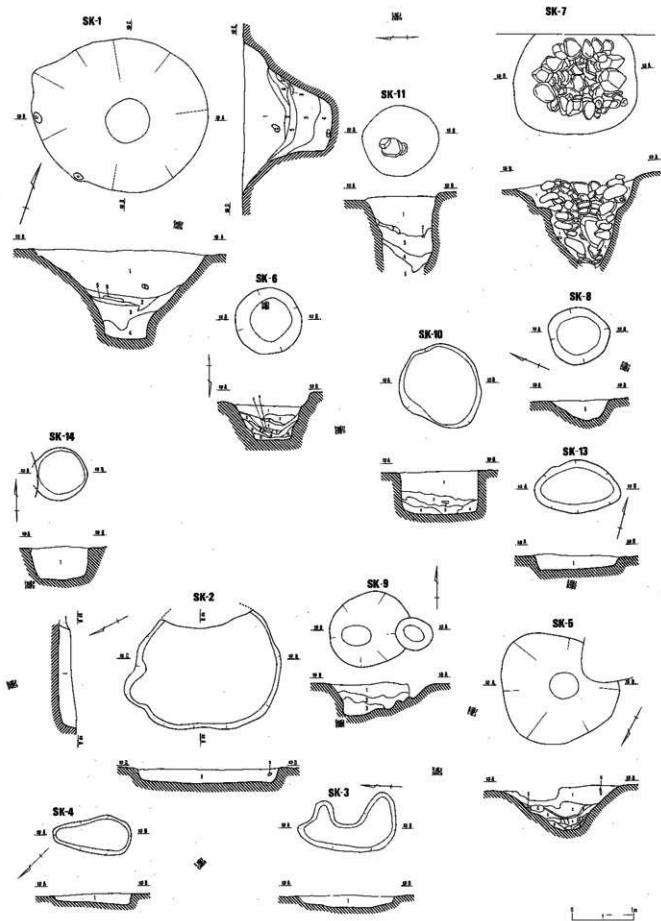
SK-2はグリットE・F-12・13に位置する。長径約2.5 m 、短径2 m 、深さ検出面から約20 cm を測る、円形。

SK-3はグリットD-10に位置する。長軸約1.6 m 、横軸約0.4 m と約0.9 m 、深さ検出面から約20 cm を測り、凹状を呈する。

SK-4はグリットC・D-9に位置する。長径約1.2 m 、短径約60 cm 、深さ検出面から約20 cm を測る、楕円形。

SK-5はグリットD-2に位置する。長径1.9 m 、短径1.7 m 、深さ検出面から0.7 m を測る、やや円形。

SK-8はグリットC・D-7・8に位置する。径



第16圖 井戸・水溜め・土坑

第3表 井戸・水溜めなどの観察表

番号	遺構番号	種別	形態		規模 m		推定時期	出土位置	備考 m
			平面	断面	直径	深さ			
1	SK1	素掘	円形	杯形	2.45	1.4	中世?	E・F-14	井戸
2	SK11	〃	楕円形	楕弾形	1×1.2	推定1.3	〃	F-10	井戸
3	SK7	石組	〃	V字形	0.8	1.2	〃	E-5	掘り方1.95×約1.7
3	SK14	素掘	円形	柄杓形	0.85	0.53	〃	E-13	井戸1に接続
5	SK10	〃	楕円形	〃	1.35	0.7	〃	F-11	水溜
6	SK6	〃	円形	碗形	1.5	0.55	〃	E-4・5	水溜

約1.1m、深さ検出面から約30%を測る、円形。

SK-9はグリットG-9に位置する。長径約1.3m、短径1.2m、深さ検出面から0.5mを測る、やや円形。

SK-13はグリットA-2・3に位置する。長径約1.4m、短径約0.9m、深さ検出面から24%を測る、楕円形。

2 遺物

1) 中世の須恵器 (第17図9～28、表9～31)

珠洲系陶器の片口鉢または、節目のある片口の摺鉢は、中～大形 (直径30%前後) のものが多い。破片資料のため、節目のみられるものは、摺鉢と標記した。同体と見られるものは少なく、口縁形態も多様であるから、長い間この遺跡に住んだ人達の欠かすことのできない、生活用具だったと考えられる。

食料・薬・薬品の原料をすりつぶす、こねるなどの用具で、石臼 (検出なし) とともに、中世の庶民の生活に欠かすことの出来ない物であったと考えられる。

この珠洲焼成製品が北信地方に本格的に流入しているのは、13世紀代からとみられる。そして15世紀前半までがピークとみられている。飯山市の長者清水遺跡、三水村岩袋遺跡、中野市茶臼峰遺跡の火葬灰骨器の双耳壺、同市の安源寺遺跡の摺鉢 (片口大鉢) などは以前から知られていた珠洲焼成製品で、その後の発掘調査などで多くの出土例がある。

安源寺遺跡の摺鉢は14世紀前半代の製品で、口縁形態が22と同じである。9は前者より半世紀古い13世紀後半の製品で、13・25は15世紀前半の珠洲製品と推定される (吉岡康暢『中世須恵器の研

究』1999)。

19は直径32%の摺鉢で、白灰色した大形品である。口縁形態から15世紀前半の珠洲製品とみられるが、生産地と年代が異なる可能性がある。

2) 瓦器 (第17図29・30、第4表32・33)

図30は、推定直径約22%、深さ8%の瓦器の手焙り (小型の火鉢) である。破片資料で底部が失われている。焼成は良好で、口縁には被熱を受けた箇所がある。外の器壁に縦の区切り線があり湾曲があって、器形が花びらの平面を模したようになっている。その区切り線内の口縁下に桜花が2個 (?) 押捺されている。

このような硬質瓦器の小形火鉢は、18世紀後半になって出現し、爆発的に普及すると言われている。個人の所有、個別の使用が背景にあると考えられる。

3) 中世土師器 (第18図7、第7表9)

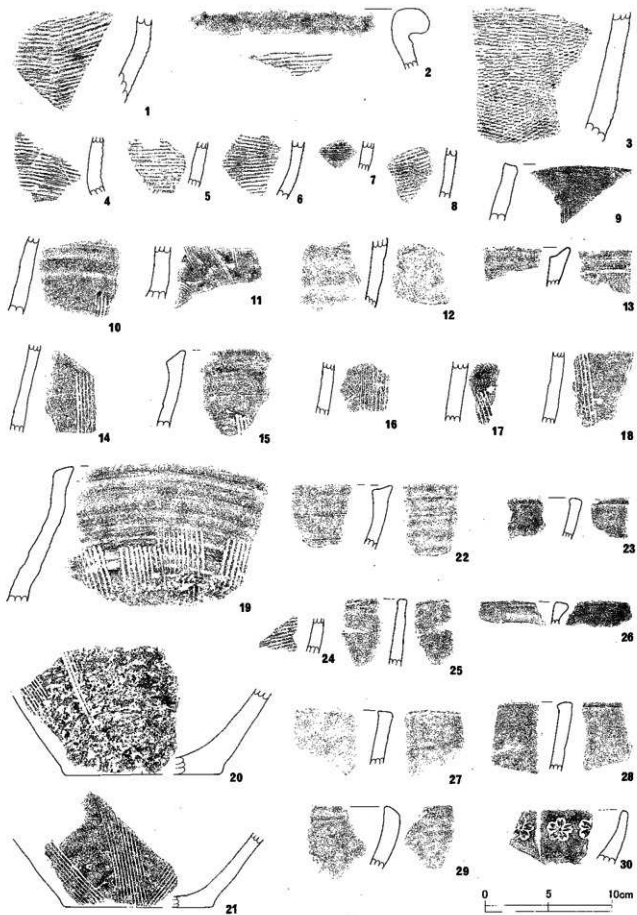
器厚は比較的薄く、淡赤～白灰色の小皿で、かわらけと呼ばれる小形土師器である。このように深さ1%にもみえないかわらけは、中世では14世紀代の所産とみられる。

4) 銭貨 (第5表)

検出した5枚は北宋 (中国) 銭ばかりである。11世紀から12世紀初めのもので、元豊通宝は本邦出土銭で、2番目に多いといわれている。被熱したものが多。検出箇所付近の遺構に溝や柱穴、井戸などに存在し、中世の住居の存在が予測され

第4表 出土古銭一覧表

番号	銭名	書体	国名	初鑄年	出土位置
1	嘉祐通宝	篆書	北宋	1056	表面採集
2	熙寧元寶	〃	〃	1068	グリットD-7
3	元豊通宝	行書	〃	1078	グリットD-7
4	元祐通宝	〃	〃	1086	グリットE-9
5	政和通宝	篆書	〃	1111	グリットD-11



第17図 古代以降の遺物

第5表 須恵器などの観察表(破片資料)

番号	図版 番号	部位	器種	推定年代	口縁形態	器厚 \times	色 調	使用痕	出土位置	備 考
1	1	肩部	甕	平安時代	—	1.0	青灰色	—	表面採集	内当具痕
2	2	口縁部	◇	◇	円形	1.1	◇	—	S K7	
3	3	胴部	◇	◇	—	1.3	◇	—	S K7	内当具痕
4	4	肩部	◇	◇	—	0.8	白灰色	—	D-11	
5	5	胴部	◇	◇	—	0.8	青灰色	—	表面採集	
6	6	◇	◇	◇	—	0.8	◇	—	表面採集	
7	7	◇	壺	◇	—	0.7	◇	—	F-9	挿描文?
8	8	◇	甕	◇	—	0.9	◇	—	表面採集	
9	9	口縁部	摺鉢	中世	平皿	1.1	◇	少	Pit-20	
10	10	上半部	◇	◇	—	1.1	◇	中	S D-1	
11	11	下半部	◇	◇	—	1.2	◇	大	F-10	
12	12	上半部	◇	◇	—	1.0	白青色	大	表面採集	
13	—	下半部	—	◇	—	1.0	◇	—	S D-2	
14	13	口縁部	摺鉢	◇	内傾中凹	1.0	青灰色	—	表面採集	
15	14	上半部	◇	◇	—	0.9	白青色	大	Pit-28	
16	—	下半部	—	◇	—	0.9	◇	—	S D-2	
17	15	口縁部	摺鉢	◇	内傾平	1.1	灰色	少	Pit-27	
18	16	中辺部	◇	◇	—	0.9	◇	大	表面採集	
19	19	上半部	◇	◇	内傾平	1.1	灰白色	大	B-11	卸目10条
20	20	下半部	◇	◇	—	1.2	白青色	大	D-8	
21	21	◇	◇	◇	—	0.8	◇	大	表面採集	卸目10条
22	17	◇	—	◇	—	0.9	青灰色	—	D-8	
23	18	◇	摺鉢	◇	—	1.0	白青色	大	S D-2	
24	22	口縁部	鉢	◇	内傾平	0.9	白灰色	—	F-11	
25	—	中辺部	—	◇	—	1.0	青灰色	—	F-9	
26	23	口縁部	鉢	◇	円い	0.8	◇	—	F-9	
27	24	中辺部	—	◇	—	0.9	◇	—	F-8	
28	25	口縁部	鉢	◇	平	0.9	灰白色	—	F-9	
29	26	◇	◇	◇	僅か円	0.5	青灰色	—	S K-7	壺?
30	27	◇	◇	◇	平	1.0	灰青色	—	E-9	
31	28	◇	◇	◇	◇	1.0	◇	—	F-10	30と同体
32	29	◇	瓦器	◇	外傾平	1.1	◇	—	S K-3	火鉢
33	30	◇	◇	近世	円い	0.8	暗青灰色	—	S X-3	手焙り

たが、住居址は明確に確認されていない。簡素で短期間存在した焼失住居の可能性があり、銭貨はその遺品とみられる。

5) 砥石 (第18図1~5、第6表)

1の砥石は使用中に半分に欠けたものである。一つの面に針状のものを研いた痕跡があり、他の面は平滑で中がくびれている。2~5の4点は使用限界まで使用されて小品で、半欠している。1の側面にも2と同じ痕跡がある。これらの砥石には年代の幅があるとみられる。

7) 曲物 (まげもの) (第18図6、第7表10)

曲物はグリットF-11の井戸から検出されたものである。ほかにも板状の碎片があった。粘質土のため、水分が保持されて保存されたものとみられる。検出箇所の関係から桶、蒸籠(せいろう)、飯櫃(おひつ)、納箱などの可能性がある。

残存の曲物の大きさは、長さ約23 \times 、幅5.5 \times 、厚さ0.4 \times である。推定樹種は椴で、柁目取りである。内面に刃物で平均1 \times 幅、深さ0.2 \times (残存の計測)、縦方向、斜めに傷を入れ、曲げ加工を容易にしている。椴皮などで綴じ合わせた箇所はみられない。

第6表 砥石観察表

番号	実測番号	用途	形状	原型	使用痕	出土位置	備考
1	1	中砥	半欠	長方形	3面	Pit-10	中途でくびれて切断
2	2	◇	◇	◇	4面	No 2 粘土採掘址	◇
3	3	◇	◇小	◇	◇	S K-10	◇
4	4	◇	◇	◇	◇	S K-4	◇
5	5	仕上げ砥	◇	◇	◇	S K-12	◇

第7表 その他の出土品

番号	実測番号	遺物	材質	形状	色調	出土位置	備考
1	—	管玉	滑石	半欠	濃緑色	表面採集	穿孔片えぐり
2	—	歯		奥歯	白色	D-8	小型草食獣
3	—	鉄製品	鉄	くさび	鉄錆色	F-9	
4	—	鋲滓		破片		S K-8	羽口の先か
5	—	◇	鉄	◇		Pit-23	小鋲治段階
6	—	磁器	青磁	碗	淡緑色	表面採集	貫入あり
7	—	小壺	灰釉	無頸壺	灰白色	B-11	上半部軸葉
8	—	碗	陶器	碗	白色	Pit-22	白瓷(山茶碗)
9	第18図7	燈明皿	土器	小皿	淡赤色	G-10	かわらけ
10	第18図6	曲物	栓?	円形	暗褐色	S K-11	内側に1 \times 間隔に刻線

第4節 近 世

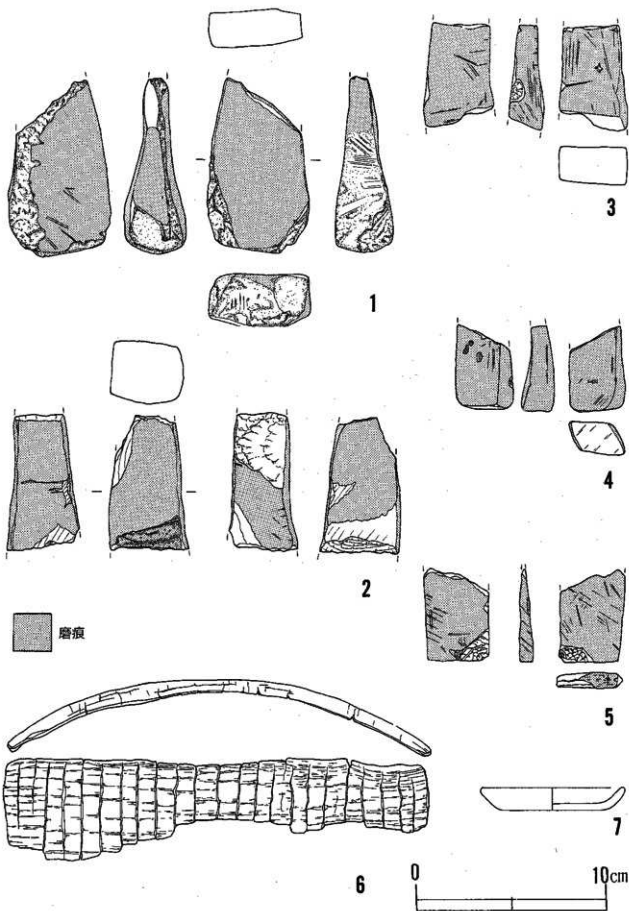
1 遺 構

石組み排水路

試掘当初に耕作土を除去した時に、石列の上部が確認された。そして遺構のNo 2 粘土採掘址を破壊して作られていた。この石列はグリットC-1~C-5の東西方向にあり、東に傾斜し、東方には未調査部分がある。確認された排水路の断面積は、長さ15.5 \times 、幅10 \times 前後である。ほとんどに川原石を使用し、最大長さが25 \times 、幅15 \times の細長い石を縦長に2列に並べて空間を作っている。蓋

石の最大の長さが40 \times 、幅30 \times の平石を横架している。掘り方の幅は約50 \times で、列石には裏込め石がある。

遺構は埋設排水路(又は暗渠排水路)とよばれるものである。構築に労力を要する事と、一時に多くの水を流す目的が看取される。西の終点付近に、水に関係する施設の遺構が確認されていない。この南側には石組み井戸が検出され、調査区の東南には柱穴も多数みられるから、住居(建物)に関係する排水路の可能性がある。構築年代は近世以降とみられる。



第18図 紙石・曲物・かわらけ

第Ⅳ章 ま と め

平成16年(2004)の夏は酷暑であった。飯綱平遺跡は高台にあるため、そよ風などがあり、しのぎやすかったかも知れない。住宅団地造成のため、10年前にこの遺跡を発掘した。いま見るとその区域外まで新しい住宅が立ち並んでいる。今回の調査もその延長上にある。平成17年は豊田村と中野市が合併するため、村としては最後の発掘調査報告書である。

前回の調査では平安時代の遺構・遺物が中心であったが、今回の調査では縄文時代後期と、中近世の遺構・遺物が検出されている。縄文時代後期に属する遺構・遺物は、約3500年前の加曾利BⅠ・Ⅱ式に併行するNo2粘土探掘址と、そこで検出された土器と凹石。さらに新しい段階の曾谷・安行・高井東式に併行する、後期末葉に属するNo1粘土探掘址と、そこで検出された土器、黒曜石製の石刃フレークなどである。また、検出された多数の土器の底には網代痕があった。二つの該期は、近県はもちろんこの地方でも遺構・遺物の希薄な時期にあたる。短期間な遺跡であるため、土器の変遷を知る上で有益と思われる。

平安時代に属するものは、甕などの須恵器片のみである。中世では井戸・溝・柱穴の遺構と、古銭、摺鉢、かわらけなどの生活に必要な遺物があった。残念ながら住居跡が明確にできなかったが、短期間の住居が、付近に存在するとみられ、発掘面積の割に井戸の数が多かったことにも関連しよう。

近世以降では井戸や水溜め、石組み排水路などの畑を耕作するために必要な遺構があった。また、現代の作物栽培に必要だった畝の深堀跡などが大地に残されていた。

今回の発掘調査は、豊田村がここに住宅団地の増設を計画したことにはじまった。この間、長野県教委、県埋蔵文化財センター、豊田村土地開発公社、同教委などのご指導を受けた。さらに豊田村立豊田中学校はじめ、近隣の方々のご理解とご協力をたまわった。

発掘作業、整理作業、報告書作成は、(財)中野広域シルバー人材センターの受託により、労務、整理作業に多大のご支援をいただいた。また重機運転労務、整理作業に参加された方々など、すべての発掘関係者の方々に感謝申し上げます、おわりといたします。

檀原 長則

- 神田五六 信濃水高地方の玉類『信濃』Ⅱ-17-5 1943
- 神田五六 長野県下水内郡豊井村南大原縄文諸磯遺跡『信濃』Ⅲ-3-8 1951
- 神田五六 縄文諸磯期における低地性遺跡と高地性遺跡『信濃』Ⅲ-4-9 1952
- 桐原 健 北信替佐の弥生式土器『信濃』Ⅲ-8-6 1956
- 宮沢 桂 北信濃川久保出土の墨書土器『信濃』Ⅲ-10-12 1958
- 高橋 桂 北信月夜岳遺跡調査略報『信濃』Ⅲ-15-3 1963
- 桐原 健 南大原遺跡のV字溝『高井』5 1967
- 桐原 健 下水内郡豊田村笠倉の弥生式遺跡『高井』6 1968
- 豊田村教育委員会『南大原遺跡』上今井橋架け替え工事の伴う発掘調査報告書 1980
- 桐原 健 縄文時代における千曲川漁撈について『高井』54 1981
- 植原長則 替佐城跡採集の陶磁器『高井』96 1992

圖 版



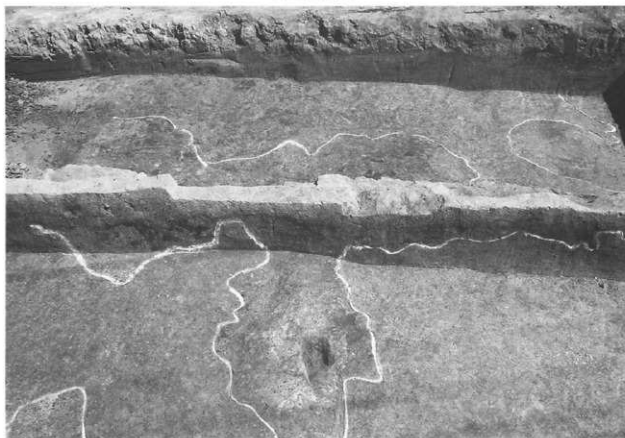
調査区全景



表土剥ぎ



No.1 粘土探掘址



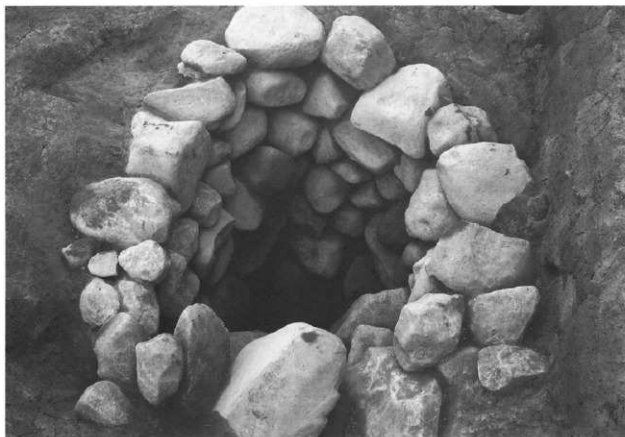
No.1 粘土探掘址検出



No.2 粘土探掘址



No.2 粘土探掘址地層断面



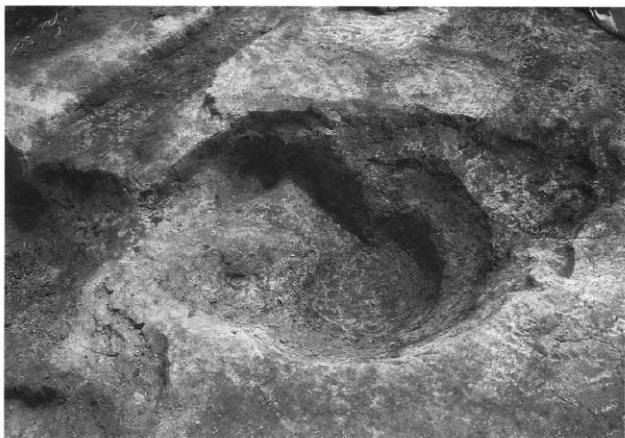
石積井戸



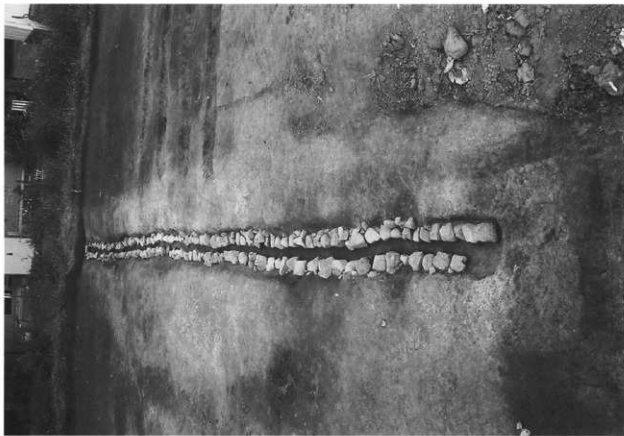
SK-1



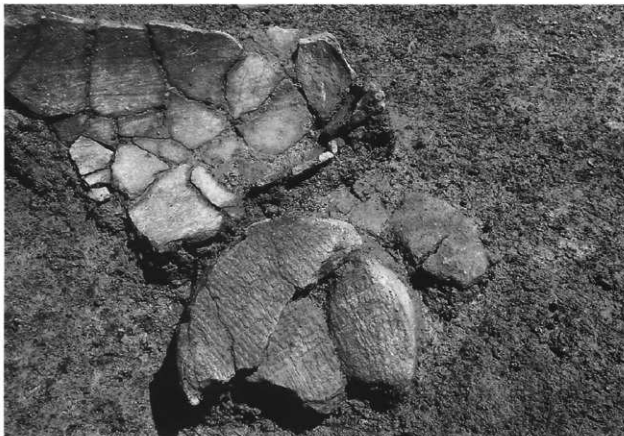
S K-14



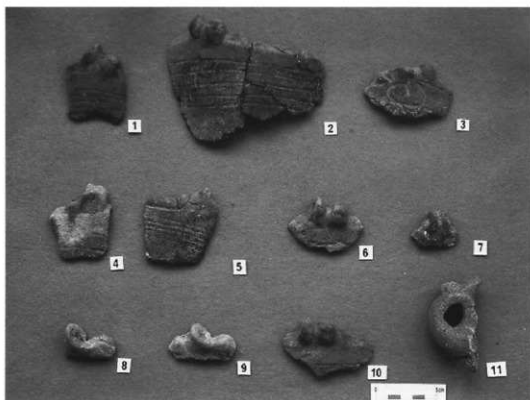
S K-5



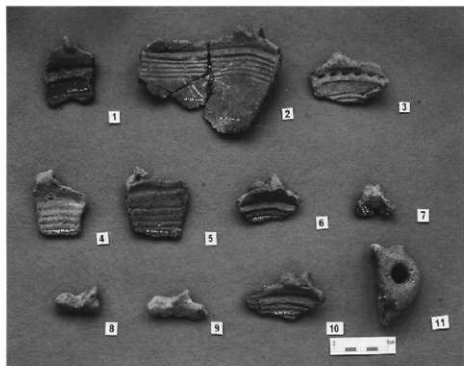
石組水路（重石を除去した状態）



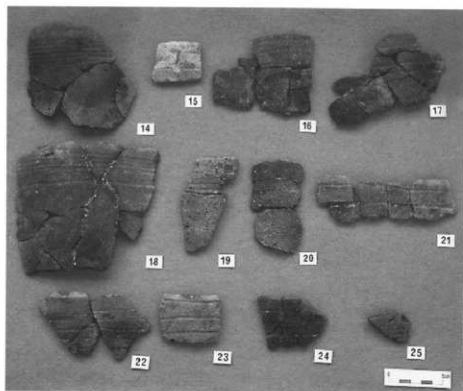
底部圧痕土器出土状態



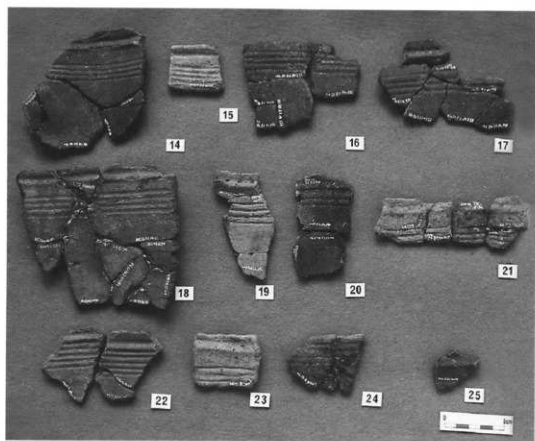
縄文後期土器(1)



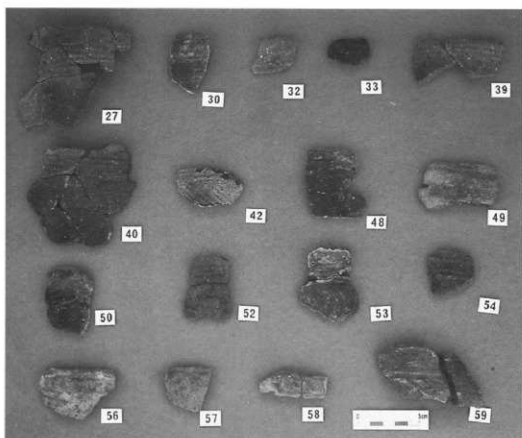
縄文後期土器(2)



縄文後期土器(3)



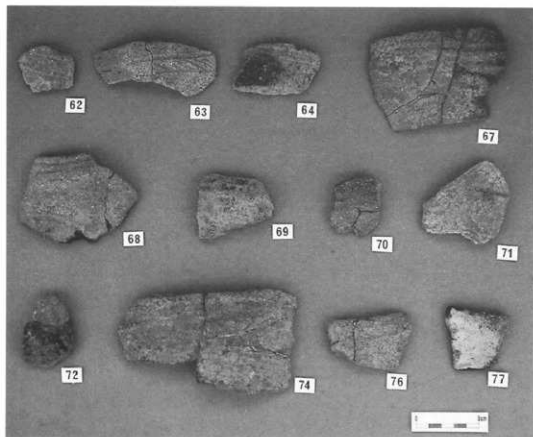
縄文後期土器(4)



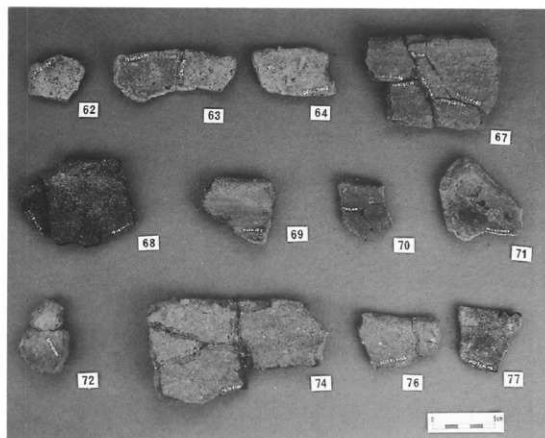
縄文後期土器(5)



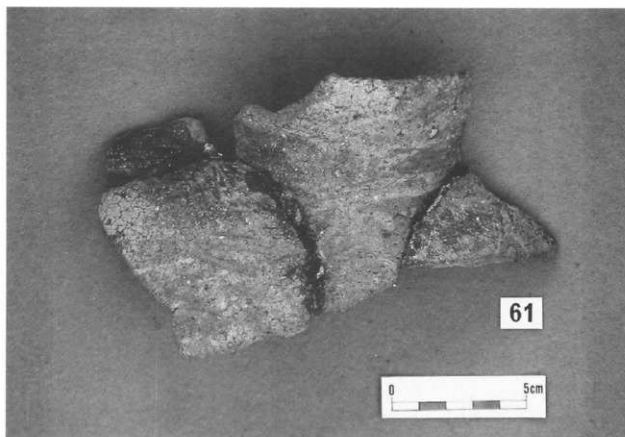
縄文後期土器(6)



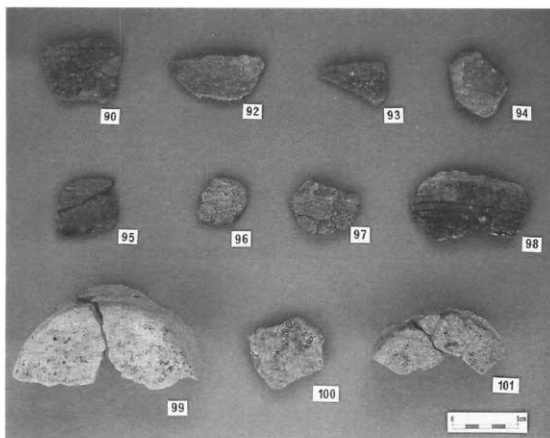
縄文後期土器(7)



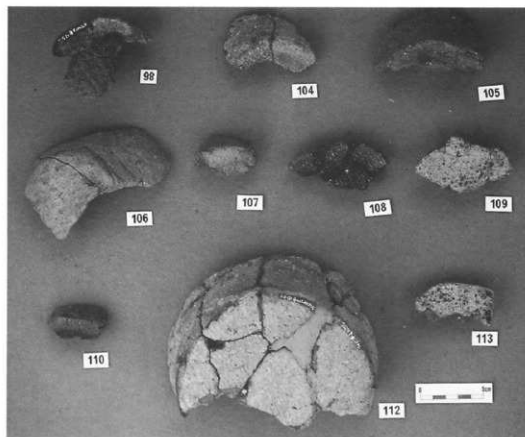
縄文後期土器(8)



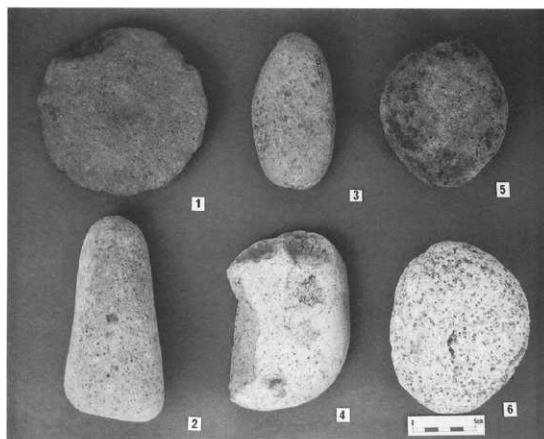
縄文後期土器(9)



縄文後期土器00



縄文後期土器00



石器

飯網平遺跡発掘調査報告書抄録

ふりがな	いいづなだいらいせき
書名	飯網平遺跡Ⅱ
副書名	住宅地造成工事に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	豊田村埋蔵文化財報告書第3集
編集者	檀原 長則 竹田 保夫
編集機関	豊田村教育委員会
所在地	〒389-2101 長野県下水内郡豊田村大字豊津2509 tel 0269-38-2922
遺跡所在地	長野県下水内郡大字豊津替佐飯網平
遺跡県登録番号	6912
遺跡位置	緯度36° 46' 36" 経度138° 19' 32"
調査期間	平成16年7月13日～8月31日
調査面積	1.771㎡
調査原因	住宅地造成工事に伴うもの
種別	包蔵地
主な時代	縄文時代後期、古代、中世、近世
主な遺構	粘土探掘址、中近世の井戸址
主な遺物	縄文土器、中近世の遺物
調査機関	㈲中野広域シルバー人材センター

飯網平遺跡Ⅱ

—飯網平住宅地造成工事に伴う発掘調査報告書—

印刷 平成17年2月23日

発行日 平成17年2月28日

編集・発行 豊田村土地開発公社・教育委員会
長野県下水内郡豊田村大字豊津2508

印刷所 ほおずき書籍株式会社

